としょかんのTOMOみなみそうま
としょかんづくり講演会　平成19年5月13日

おはなし：南相馬市立図書館設計者. 寺田芳朗
寺田大塚小林計画同人代表

今日のおはなしの概要と資料

○小川町図書館の神原司書さんのﾋﾞｼﾞﾈｽﾏｯﾁｬｰとして：

・神原さんのすごさがご紹介できずに残念です。

・小川町の図書館と神原さんの資料を回覧します。

図書館立上げに見せた専門性、開館後の図書館祭りや多彩な講演会催事の様子、利用者町民の声、見学者の視点と学び、

○図書館計画で出会った３人の司書さんと図書館：おみやげ資料

・福岡苅田町図書館、滋賀能登川町の才津原さん。

図書館を成長させるしくみ　→「自殺したくなったら図書館へ」

・佐賀伊万里市民図書館の犬塚さん。

成果を毎年市民に報告・10年目の全域奉仕反省・資料の表現者として

・埼玉小川町図書館の神原さん。

福島の詩人長田弘に魅せられて・資料世界の構築表現を仕事として

○南相馬市立図書館の環境を想像して：映像で・・・

・わたしたちがﾌﾞﾛﾎﾞｰｻﾞﾙｺﾝﾍﾞﾍﾞで提案したかったこと。

資料世界構築表現と環境の調和、つながり。ｴｺﾛｼﾞｶﾙﾃｰﾆﾝｸﾞ。

・設計を終えて、どんな活動と場が想像されたか。

平面図、立面図など、ごせつめいいたします。

・開館して将来に、どんな活動と場を想像しているか。

お手伝いした伊万里市民図書館と長崎県諫早市たらみ図書館の利用者のようす・情景の映像をお見せします。

将来の南相馬図書館の情景をご想像ください。

・学校図書館との連携、ｱｸﾃｨﾌﾞﾗｰﾆﾝｸﾞ、各地では。

伊万里市民図書館では、小川町立図書館では、君津市立中央図書館では、長崎県諫早市たらみ図書館では、どのような仕組みを作り運営しているか、映像をお見せします。

○ご質問をお受けします。

○散会後も懇談の時間が準備されていると伺いました。

お時間の許す方は、
会場の図面や鳥瞰図をご覧ください。
模型のごせつめいもいたします。

○ありがとうございました。

○苅田町図書館で出会った才津原司書は能登川町に移籍されて、

緩話急題

自殺したくなったら

大阪本社配信部
吉田　満穂

「自殺したくなったら、図書館へ行こう」京都の出版社「論楽社」共同代表の田賀宗博さんは、落ち込んでいる人を励ける。こう話しかける。そんないう。1月大阪駅から新快速電車で、1時間20分、琵琶湖の東岸、比良山系から吹き下ろす春風の中に、その図書館があった。滋賀県東近江市の市立能登川図書館である。

小さな町の小さな図書館。なのに、実力はすごい。滋賀8・0、東京7・7、大阪5・8、京都4・6……全国平均4・7冊。1人年間に、どのくらい公立図書館の本を借り出しているかの数字である。滋賀が全国1位、なかでも竹

＊

書架の間に椅子がある。腰掛けると、自分だけの空間が生まれる。本を読みたい人ばかりではない。読まなくてもいい。毎日、朝から来ている70歳の女性がいた。椅子に座って、小さな声で童話を口ずさむ。疲れると、お茶を飲んで、ひと休み。「いつも、まっすぐ（今方）まっすぐいるんよ」。子供のように笑う。リストラされた中年男性もいた。

「家には、うち（自分）の居場所がのうてな」

「図書館に」人一人の居場所

画・大野隆司

人生リセット　図書館で

万冊を所蔵する能登川図書館は、12・4冊に暮る抜く。

その図書館に歩入った。空気が違う。図書館特有の無臭さがない。笑共ゥ笑ペスト」。書架は背丈ほど。豊の部屋があり、児童を遊ばせる。角も、見通しが悪いいな所（死角）だらけだ。ただ、この死角、そが、この図書館の大きな特色を作りたかった。ぶらりと立ち寄ることができて、人生のリセットができる場所を」。開館以来、約10年間、館長を務めた才津原哲弘さんの評だ。

「もっとあなたが自殺しようと思う年間の自殺者数が、3万人を超える。これを異常と思わなくなった時代は、どこかがおかしい。才津原さんの図書館作りにも、この視点があった。苦い思い出もある。破産した友人の自殺を「せめて、友人の居場所があったら」。だから、やり直せる図書館を演出した。

＊

「自殺をしたくなったら、図書館へ行こう」。この看板を図書館員に紹介したのは、元日本図書館協会理事長の竹内悊さんである。7年前、仙台市での講演会で米国の図書館のポスターを示した。ポスターには、積み重ねた書籍を前に、頭に拳銃を当てた男性がいた。下にひと言。

「もっとあなたが自殺しようと思うのなら、おやめなさい。その代わりに図書館へおいでなさい」

意味するのは、次のようなことだった。「図書館が所蔵する膨大な本には、あなたの自殺の原因を解決するモノが必ずあります。図書館がそれを探す手伝いをします。だから自殺はおやめなさい。これを実践したのが、才津原さんだ」。

いろんな出会いがあった。特に記憶に残るのは、がんの宣告を受け、自宅と病院を往復する一人暮らしのおばあちゃん。開館から4年間、毎日、図書館を訪れたのついに来られなくなり、本を届けると、2冊の大学ノートに読んだ本の感想がびっしり。そして、涙せずに読めない表情で、こう伝えた。「図書館は、魂を癒す所ですね」

（命やすらぐ図書館）を作り続けた才津原さん。3月末、60歳で退職した。晴れ、この人生も、以前住んだことのある九州の小さな町で、小さな図書館作りに取り組むという。

〒100・8020　読売新聞東京本社編説部　kaisetsu@yomiuri.com

○小川町図書館の図書館便りにみつけた神原司書さんの文章、

年の始めに・・・本と図書館と出会う

新年 おめでとう ございます 。今年も図書館をよろしくお願いいたします。

＊＊

小川町の図書館に、皆さんは何を求めて足を運ぶのだろうか。

楽しみのための本を探しに、疑問に思ったことを解決しに、時間ができたのでビデオでも見に、仕事に必要な資料を得に・・・さまざまな愉しみを求めていらして下さるのが、皆さんのお顔から察せられます。

但い図書館の頃から心掛けてきたことですが、小川町の図書館は利用者一人一人の満足度を大切にしていきたい…　例えば何十冊の本を借りることより、かけがえのない一冊に出会うための棚づくりをしたい。また、図書館に来るとどこかに自分の場所がある、自分の時間を過ごせる――そのような場・空間を提供していきたいと考えています。

さて、1月27日に講師としてお招きする詩人の長田弘さんは、「本を読むことが、読書なのではありません。自分の心のなかに失いたくない言葉の蓄え場所をつくりだすのが、読書です。」（『読書からはじまる』NHK出版より）とお書きになっています。読書の本質をよく表している言葉だと思います。そして、そのための文化を「蓄える」場所が図書館なのだと。今年もたくさんの方に図書館に出会ってほしいと願っています。

小川町の図書館を利用して下さる方それぞれが、この図書館のことを「わたしの」「わたしたちの」図書館と思っていただけるようなサービスを、これからも目指していきたいと思っています。　K.K

《読書・図書館・私たちの生活》――長田　弘氏　の講演を聴いて――

長田弘さんの著作を読んで、今まで私は、本を読むということは「本とより深く関わること、つまり本と自分とが向き合うこと」のように、漠然と捉えていました。

先月２７日の図書館での講演のなかで、長田氏はいくつかのキーワードを提示しました。「明窓浄机」「気分」「たしなみ」「門前の小僧」並べただけでは、意図は伝わりませんね。この４つの言葉の底に流れるものは、生活のありよう、ということです。昔、といってもつい何十年か前は、本を読むには「明るい窓と清らかな机が必要だった」。さまざまの習い事、教養は生きる上での「たしなみ」だった。人のありようを見て学びたくとも、現在（いま）学ぶ「門前」がない。

そして、本を読むのは「気分」なのだと。生活する上での心の豊かさが、「気分」を創り出していく。私たちの「図書館」がどう利用されていくのか、利用者の、そして職員の生活者としてのありよう（すなわち「気分」）が、深いところで問われている気がしました。

長田氏の問いかけに、もう一度原点に遡って「図書館」のありようを考えてみようと思っています。　K．K